「新雪と共に溶け込んでゆく」

登場人物

緑野円	(16)	(5)	千葉県立大原高等学校１年生
佐野友	(16)		円のクラスメイト
秋津桃華	(31)		千葉県立大原高等学校教員
緑野洋二	(38)		円の父親
緑野鈴音	(35)		円の母親
遠野琴子	(29)		円の親戚
小源氏新	(50)		市営墓地極楽苑の住職
牧町秀作	(36)		千葉県立大原高等学校教員
葉山翔也	(16)		円と一緒に補講を受講する同級生
男性A			砥峰高原で出会った手を振る男
カップル男A			ホテルラブすすきの宿泊客
カップル女A			ホテルラブすすきの宿泊客
老母A			ホテルラブすすきの受付員
中年男性A			二井住吉銀行豊玉支店に居た来店客
中年女性A			二井住吉銀行豊玉支店に居た来店客
生徒A			円のクラスメイト　※声のみ

○千葉県立大原高等学校・全景

曇り空一面。校門付近にヤシの木が等間隔に植栽されている。

○同・教室

教室内には約30名の生徒。

生徒達はブレザーを羽織った装い。

教壇に居る秋津桃華（31）が耳に髪の毛をかけながら、質問を投げかける。

桃華「昨日予告したばかりだから持って来ている人といない人がいるかな」

中学2年生用の教科書を手にする桃華。

桃華「ちなみに持って来られた人はどれ位？」

半数の生徒が挙手をする。

桃華「おー意外といるね、持って来ている人は手元に用意して」

半数の生徒が机の中を捜索し始める。

窓際の席には、前髪をピンク色のピンで留めている緑野円（16）。

円、机の中を捜索することなく隣の席

にいる佐野友（16）に対して、
円「ねぇ、見せて」
佐野「うん、いいよ」
円と佐野は机をくっつける。
円「よく、中2の教科書なんて次の日に持って来られたね」
佐野「うち、基本的に教材とかは保管しているタイプだから」
円「嘘！お兄ちゃんとかのも？」
佐野「そう、だから教科書代とか浮く」
円「いいなー」
佐野「別に円の家、貧乏じゃないじゃん」
円「いや、買い忘れが多いからさ」
小声で話す円と佐野。
桃華「では何故、今日教科書を持って来てもらったのか。その理由は……」
桃華、素早くページを捲る。
桃華「走れメロスです。皆、覚えている？」
走れメロスが描かれたページを生徒に見せる桃華。

円「もちろん」
無表情かつ小声で呟く円。
桃華「じゃーなぜ今更、走れメロスを？と思った人いるんじゃないですか？」
円「ごもっとも」
再び小声で呟く円。
円を見てくすりと微笑む佐野。
桃華「実は学期末にやる水仙という話と共通点があります。それは一体何でしょう？」
円と佐野、辺りを見渡す。
桃華「……誰も分からないと。答えは同一作者だと言うことです」
佐野「太宰治……」
佐野、小言を呟きながら中２の教科書の走れメロスのページを眺める。
桃華「そう佐野くん。ご存知、太宰治は走れメロスや人間失格を書いた作者です」
佐野「地獄耳かよ……」
桃華「そうです佐野君。だから授業中はできるだけ静かにしましょう」

周りの生徒が忍笑する。
円、佐野に対して、人差し指を口に当てながらからかう表情をする。
桃華「走れメロスを書いたのは1940年、水仙は1942年と言われています」
真剣な眼差しで桃華を見る生徒達。
桃華「この2年間で太宰は何を思い、どのように変化したのでしょうか？」
口角を下げながら聞く円。
桃華「今日はそれを感じ取る時間にしたいと思います。それでは103ページ、皆は目で追ってね」
生徒達は目線を教科書へと落とす。
円、教科書に視線を向けることなく、外を見つめる。
桃華「走れメロス。作者、太宰治」
外の景色を眺める円。外は曇り空一面。
桃華の声「メロスは激怒した」

○（回想）砥峰高原・ススキ野原

上空は曇り空一面。
地平線上には生い茂ったススキ野原。
その中にピンク色のニット帽を被った
緑野円（5）と丸眼鏡をかけた緑野洋
二（38）が居る。
円と緑野は手を繋ぎながら背の高いす
すき野原の中を歩く。
緑野「大丈夫？しんどくない？」
関西弁で話す緑野。
円「うん、大丈夫」
緑野「そうか、パパはちょっとしんどくなっ
てきたな」
円「しんどい？どうして？」
緑野「うん？日頃の……不摂生のせいや」
円「不摂生って？」
緑野「体に良くないことばっかりしとること」
円「タバコとか？」
緑野「そう、あとお酒とか？」
円「あとは、あとはママとの喧嘩とか？」
緑野、笑いながら円の顔を見つめ、

緑野「そうだね、それも不摂生の一つだね。
パパに似て円は誘導するのが上手やな」
円「でも円、パパと似ている所、あんまり好きじゃない。それでこの間、喧嘩した」
緑野「好きじゃないの？パパは結構それで得しているで」
円「でも、好きじゃない」
緑野「そっか……」
円と緑野はすすき野原を抜け、見晴らしの良い高原地帯へと出てくる。
緑野「さー、ママはどこにいるかな？」
手を繋いだ円と緑野は辺りを見渡す。
円「あ、あそこ」
緑野鈴音（35）が盛り上がった丘の上でレジャーシートを敷き、手を振っている。
円は緑野の手を離し、鈴音のいる丘に向かって走り出す。

○（回想）砥峰高原・丘の上

円、這いつくばりながら鈴音のいる丘の頂上まで登り切る。

鈴音「おかえり。どうだった探検は？」

笑顔で円を迎える鈴音。

円「ん？大したことなかった」

鈴音「大したことなかった？」

笑いながら円の返答に反応する鈴音。

緑野、息を切らしながら丘の頂上まで登り切る。

鈴音、自身の膝の上に円を座らせる。

鈴音「そうか、大したことなかったか。でも帽子にたくさん総がついているよ」

鈴音、円の被っているニット帽を脱がせ、総を取る。

円の前髪はピンク色のピン留めで留められている。

円、額の汗を拭うため、自身の顔をぺたぺたと触る。

鈴音「あーあー、前髪も崩れる」

鈴音、円の崩れた前髪をピン留めで綺

麗に留め直す。
満足そうな表情をする円。
緑野「僕の今日のピクニック飯はどう？」
鈴音、緑野に親指を立てて見せる。
満足そうな表情をする緑野。その後、
腰に手を当てながら、辺りを見渡す。
緑野「あっ、右手」
顎をしゃくりながら、方向を示す緑野。
鈴音、緑野の視線の先を向く。
円も同様に緑野の視線の先を向く。
円の視線の先には、遠く離れた丘の上
で男性Aが手を振っている。
緑野、辺りを見渡しながら、
緑野「彼は僕らに振っているのかな？」
鈴音「そうじゃない？ほら、円も」
円、鈴音に腕を掴まれ、手を振る。
緑野と鈴音も笑顔で自身の手を振る。
反応してもらったことが嬉しい様子の
男性Aは、更に大きく手を振る。
緑野「おお、すごいな」

緑野は失笑しながらも手を振り続ける。
鈴音の膝上に座りながら手を振る円。
その後不思議そうな表情をしながら、
円「ねぇパパ、手を振ると皆嬉しいの？」
緑野「んー、少なくともパパは嬉しいで」
円「ママは？」
鈴音「え？ママも円に手を振られたら、いつでも嬉しいよ」
円「じゃーあのおじさんは？」
遠くの丘で手を大きく振る男性A。
緑野「あのお兄さんも……」
鈴音「嬉しいとは思っているはずよ」
円「……嬉しいのか。嬉しいなら、……振ってあげるか」
円、鈴音の手を振り払い、自身で激しく手を振る。
円が手を振るい否や、男性Aは嬉しそうに、飛び跳ねながら手を振る。
緑野と鈴音は手が止まり、円の発言に驚いている様子。

風によって左右に揺られるススキ。
その上空では、先ほどよりも少し早く
雲が流れている。

○千葉県立大原高等学校・教室
雲の流れる速度が少し早まった曇り空。
桃華の声「曇り空が何を生むって言うんだ、
セリヌンティウスが言う」
外の景色を無心で眺めている円。
桃華の声「授業を聞いていない者は補講です
よとメロスは言う」
肘で円の脇を突く佐野。少し焦った表
情をしている。
円「何？」
不服そうな顔を佐野に見せる円。
桃華「さて、円さん」
円の瞳孔が少し見開く。
円「はい、なんでしょう」
桃華の顔色を伺う円。
桃華「先ほどの問いに対する答えは？」

円、少し困惑した表情をしながら、
円「メロスは人を信じたかったのではない。
信じるという概念を伝承したかったのだ」
静寂に包まれる教室。
桃華「……放課後、補講ね」
がっくりと肩を落とす円。
その横でニヤニヤしている佐野。

○同・校庭（夕）
校庭の時計が 16:30 を示す。
多くの生徒が下校している様子。

○同・職員室（夕）
円、職員室内にいる牧町秀作（36）と
話している。
牧町「秋津先生？あー今日は用事があって早
めに帰るとか言っていたかな」
円「え？来てと言われたので、こっちは来た
んですけど」
牧町「いや、僕に言われてもね。困ったな」

○市道102号線（夕）

収穫を終えた田園風景一面。

その中を自転車で駆け抜ける円。

円M「最近の大人は自分勝手だ。自分の発言にまるで責任を持っていない」

ゆっくり歩く老婆の横を通り過ぎる円。

円M「感情を支配するのではなく、感情に支配される。大人になったら、成りたくない人ランキング5位くらいには入りそう」

市道102号線と描かれた標識の横を、自転車で通り過ぎる円。

円「鎌かける人、本当に苦手。あーーー」

ドスの効いた声を発しながら、自転車を漕ぐ円。

○円の実家・外（夕）

塀に囲まれた木造の平屋。

円、門前で自転車を止め、塀の内側に入って行く。

○同・中（夕）

扉を開け、鍵を閉める円。一言も発する事なく、屋内へ入って行く。

玄関を上がると左手に広々とした居間があるが、円は寄ることなく奥へ進む。

○同・居間（夜）

真っ暗な居間。その空間に勢い良く鍵を開ける音が響き渡る。

玄関と廊下の照明が点灯した後、スーツ姿の遠野琴子（29）がビニール袋を片手に廊下を急ぎ足で歩く。

○同・円の部屋（夜）

照明が付いていない室内。

本棚には沢山の漫画やCD、机上には日本地図やぬいぐるみ、幾多のピン留めが置かれている。

円、学校規定のジャージを着て、ベッ

ドの上で携帯を触っている。
円、メールアプリを確認する。受信ボックス一覧には『件名：二井住吉銀行振込入金のお知らせ』のメールが何通も受信されている。
円、表情を変えず、窓の外を見つめる。

○同・居間（夜）
明かりの灯った居間。
エプロン姿の琴子が居間のテーブルに大鍋を置きに来る。
琴子「円ちゃん、ご飯」
大声で叫ぶ琴子。その後、急ぎ足で台所へ戻る。
円、ゆっくりと居間に歩いて来る。
円、テーブルを見るや否や、
円「琴子さん、何度も言わせないで。鍋敷き」
遠くにいる琴子へ大声で叫ぶ円。
琴子「なんて？」
円「鍋敷き！」

×　×　×

ぐつぐつと煮込まれている水炊き。

鍋を見つめる円。

円の様子を見ながら、お茶を注ぐ琴子。

琴子「もう食べ頃だと思うけど？」

円「そうなの？じゃー、いただきます」

自身の取り皿に水炊きをよそう円。

円「琴子さんのお皿も取って」

琴子「いいよ、自分でするから。ありがとう」

円、自身の皿に盛った水炊きを頬張る。

円「うほ、うまい。食べたことのある味」

琴子「おいしい？鈴音さんのレシピだからね」

円「……果たしてそうでしょうか」

円、小言を呟きながら水炊きを食す。

琴子、円の様子を横目で伺う。

円「……琴子さんは本当にすごいですね」

琴子「何が？」

円「親戚と言うだけで、よくぞ面倒くさい私のお目付け役を全うして下さっている」

琴子「なんでそんな卑下すること言うの」

円「卑下じゃないよ、紛れもない事実」
円と琴子、互いに表情を変えない。
琴子「うん、おいしい」
円「でしょ？私が言うのもおかしいけど」
黙々と食べる円と琴子。
円「水炊きって、福岡で有名だよね？」
琴子「そう、これは博多風ではないけどね」
水炊きを食る円と琴子。
円「……ねえ、締めは？」
琴子、鍋の残りを確認する。
琴子「まだ半分以上残っているよ。気が早い」
円「私、せっかちだから」
琴子「いいことないよ、せっかちだと」
円「いいの、それが私の生き方」
円、立ち上がり台所へと歩き出す。
琴子「血は争えないな。あっ、お供え忘れて
いた」
円「いいよ、私がやるよ」
琴子「おっ、ありがとう」

○同・仏間（夜）

鈴音の遺影が置かれた仏壇。

仏壇前にご飯のお供物をする円の手元。

○千葉県立大原高等学校・教室

菓子パンを片手に机を見下ろす円。

机には『本日、多目的教室 16:30 から補講を開始します　秋津』と書かれた付箋。

円の机をチラリと見る佐野。

佐野「ほんの3分前くらいに貼っていたよ」

円、机の上に貼られた付箋を気怠げに机の隅に貼り直しながら、

円「私、この年でようやく価値観の違いっていう意味が分かり始めたかも」

佐野「何て？」

○同・廊下（夕）

多くの生徒が下校する様子。

○同・多目的教室（夕）

時計の針は 16:40 を示す。

教卓の前に桃華、学習机の前に円と葉山翔也（16）が座り、静かに補講を受けている。

円、桃華をチラチラ見ながら、手元にあるプリントの問題を解く。

桃華、円からの視線に気付き、

桃華「何？不備でもあった？」

円「……いや、今日は私のこと覚えてくれていたのですね？」

葉山の手元が止まる。その後、秋津先生の顔色をゆっくり伺う。

桃華「円さん、その言い方。すごく嫌味ったらしく聞こえるよ」

円「そう聞こえましたか？」

桃華「そうね」

円「喧嘩してもいい事ないので、直しますね」

葉山、円と桃華の様子をチラチラ確認しながら、再びプリントに視線を戻す。

桃華「……円さん、昔は活発で繊細で、人一倍気が利く子だったんだよね」

葉山、呆れた表情をする。

円、手元のペンを投げるように置き、

円「本当に私の嫌いな人に似ていますね、秋津桃華先生」

桃華「癇に障った？」

円「はい、だいぶ」

桃華「私は円さんを褒めたつもりで先程の発言をしたのよ」

円「私の発言に対する復讐にしか聞こえなかったですけど」

円と桃華、互いに顔を見つめ合う。

桃華「……こうやって、やられたらやり返すのが人間の性だから。お互い気をつけましょうね」

円「うまくまとまっていないですけどね」

円、再びプリントに視線を戻す。

葉山、眉をポリポリ掻き、プリントに視線を戻す。

再び、静寂が流れる多目的教室。

円「先生の親ってどんな人なんですか？」

桃華「私語は謹んで」

葉山「僕もう帰っていいですか？」

桃華「ダメよ、あなたは定席」

○円の実家・居間（夜）

居間のテーブルに角煮の乗った大皿が置かれている。

学校規定のジャージを着た円が居間に歩いて来る。

円、テーブルを見るや否や、

円「琴子さん、並べ方おかしいよ」

遠くにいる琴子へ大声で叫ぶ円。

琴子「なんて？」

円「味噌汁の位置」

味噌汁を右手前から左奥に移動させる円。

○千葉県立大原高等学校・廊下（夕）

多くの生徒が廊下を下手から上手に移動する中、円は反対方向へ移動する。

○同・多目的教室（夕）

多目的教室の扉を開ける円。室内には桃華しか居ない。

円は時計を一瞬確認し、

円「今日、定席の子は？」

桃華「葉山君は部活のミーティングで遅れるそうです。来るまでは、私と1on1」

渋い顔をする円。

桃華「顔に出ていますよ」

円、桃華に聞こえないくらいの大きさで溜息をつきながら、席に座る。

×　×　×

プリントが円の手元に渡される。

円、プリントの内容を確認する。

円「なんですか？これ」

プリントには『問1：なぜメロスは人を信じるという概念を伝承したかった

のか？』の設問。

桃華「貴方の叫びを記した良い設問でしょ？」

円「いや、理解不能の設問です」

桃華、椅子を円の机の前に持って来て、対面になるようにして座る。

桃華「この間の現代文の授業で、私は貴方に質問したよね」

円「はい、私に鎌をかけた」

円、可愛らしくムッとする。

桃華「そう。案の定、見事にかかってくれた。おかげで教鞭を執る意味を思い出せたの」

円、鋭い視線で桃華を見つめた後、溜息を桃華に聞こえる声量で吐く。

円「意味がわからない。他の人を指導した方が指導実績に良い事が書けますよ」

桃華「いいから、口答えせずにやってみて」

円「先生も暇ですね」

桃華「そうね、暇ね」

葉山、呑気に教室へ入室してくる。

葉山「遅れました」

円「おっ、定席君」
桃華「葉山君って呼びなさい」

○同・多目的教室（夕）

黒板に『17時迄黙学』と書かれている。
円と葉山、横並びになり座っている。
円「……葉山くんって何組だっけ？」
葉山「5組だよ。緑野さんは2組だっけ？」
円「そう。……ちなみに何解いてるの？」
円、葉山の机上を覗く。
葉山「ん？現代文の演習問題」
円「うわ、一番だるいやつじゃん」
葉山「そう。しかも大体一人だからカンニングもできやしない」
円「大変だね。キツくないの？」
葉山「微妙だね。先生と話すのは嫌いじゃないから。ちなみに緑野さんは何を？」
円の机上を覗く、葉山。
円「なんか、走れメロスの応用編みたいなの。正直、意図がわからない」

葉山「相当緑野さんのこと気に入っているね。
ようこそ、定席の世界へ。嬉しいよ」
微笑みながら言う葉山。
円「嫌だよ、早く離脱したい」
葉山「諦めな」
円「無理かな？あ、そうだ葉山君」
葉山「何？」
円「秋津先生の弱みとか面白話、何かない？」
葉山「何？脅しに使うの？」
円「違うよ、娯楽だよ娯楽。なんか無い？」
葉山「そうだな」
腕組みをしながら、考える葉山。
葉山「パッと思いつくのは」
円「うん」
葉山は円の耳元に囁くように伝える。
○同・多目的教室前（夕）
多目的教室の扉前で、円と葉山が耳打ちする様子を目撃する部活着姿の佐野。
佐野、視線が泳ぎながら、早足で多目

的室前から逃げ去る。
逃げ去る佐野とすれ違う桃華。
桃華「佐野君、お疲れ」
佐野「お疲れ様です」
俯きながら小言で返答する佐野。
不思議そうな顔で佐野を目で追う桃華。

○円の実家・居間（夜）
ダイニングテーブルにはカレーライス。
円と琴子が黙食をしている。
円、琴子の様子を伺っている様子。
琴子、カレーライスを口に運びながら、
琴子「何？おいしくないの？」
円「いや、いつも通り。美味しいよ」
カレーライスを口に運ぶ円。
円「……琴子さんは、一人旅したことある？」
琴子、カレーライスを頬張りながら、
琴子「勿論、30年も生きていればあるわよ」
円「初めては何歳？」
琴子「んー、大学生の頃かな」

円、少し残念そうな表情をし、

円「そっか」

黙々とカレーライスを頬張る円と琴子。

○コーポ勝浦・居間（夜）

デスクライトの下で、プリントの添削を行う桃華。

小気味よく、赤ペンが進む。

突然、桃華の手が止まる。

桃華の視線の先には、

『問10：筆者はどのような思いで当作品を執筆されたと考えるか？』の設問。

桃華、視線を少しだけ下げる。その先には、『腐った木に咲くひとひらの花でありたかった、と言ったところでしょうか』と書かれてある。

プリントを静かに眺める桃華。

○市道102号線（朝）

下手から上手へ自転車を漕ぐ円。

○千葉県立大原高等学校・教室（朝）

『1-2』と書かれた教室表札。

2名ほどしか居ない教室に入ってくる円。慣れた様子で、机の横に鞄を掛けながら椅子に座る。

ノールックで机の中を漁る。

机の中には一枚のプリント。

プリントをじっと見つめる円。その後、外の景色を見ながら、プリントを4つ折りする。

佐野「おはよう、円」

円「うん、おはよう」

外と景色を見つめながら、挨拶する円。

円「なんか今日……体調悪いかも」

佐野「まじ？大丈夫？」

円、4つ折りにしたプリントをカバンの中に入れる。

○市道102号線

爆速で上手から下手へ自転車を漕ぐ円。

○千葉県立大原高等学校・教室

空席になった円の席を見つめる佐野。

桃華の声「じゃー2学期最後の授業、始めますよ。ちなみに欠席者は？」

生徒Aの声「緑野さんです」

桃華の声「本当？」

生徒Aの声「はい、早退です」

桃華の声「そうですか。……熱が入るのが早いですね」

○円の実家・円の部屋

円、ニット帽を被りながら、スーツケースに服とピン留めを雑に詰め込む。

○同・廊下

スーツケースを廊下に幾度となくぶつけながら、廊下を歩く円。

その後、右手に見える居間を見て、立

ち止まる。

○同・居間

メモを書き残す円の手元。

書き終えた円、用紙を見下ろしながら、

円「恨むならメロスを恨んで下さい」

円、メモ用紙が飛ばないよう近くにあるリモコンを錘とし、居間から出る。

○県道102号線

上手から下手へ自転車を漕ぐ佐野。

○円の実家・玄関前

インターホンを鳴らす佐野。

応答がない。

再度、インターホンを鳴らす佐野。

応答がない。

○同・庭

佐野、電話を掛けながら庭を捜索する。

円の部屋の窓を庭からノックする佐野。
佐野、掛けていた電話が繋がる。
佐野「あっ、円。大丈夫？今、大原病院？良かったら俺、看病するよ」
円の声「ごめん、今病院じゃ無いんだ」
佐野「え？じゃー今どこ？家に居るの？」
円の声「今？今はちょっと幻想を追い求めて」
佐野「幻想？それってどこよ」
円の声「どこかと言うと……」

○快速エアポート線・外
降雪の中、走る快速エアポート線。

○快速エアポート線・中
座席には厚着をした大勢の人々。
円、一人黙って外の景色を興味深く眺めながらポツンと座っている。
車内アナウンスの声「次は、札幌、札幌です。お出口は右側、ドアから手を離してお待ち下さい」

○札幌駅・南口（夕）

視界がほとんど白に染まるほど、雪が激しく降り続ける。

スーツケースを片手に、牧歌の像の前で立ち尽くす円。その後、雪景色を写真に納めようとする。

満足そうな表情をする円。

携帯の液晶画面を何度も拭きながら、携帯を操作する。

その後、辺りをキョロキョロと見渡し、迷いながらも前方へ歩き出す。

○札幌中央バス・車内（夕）

車窓越しの雪景色。数秒間走行しても積雪の様子は変わらない。

円、窓にもたれ掛かりながら、外の景色を見つめる。

○東豊高校前バス停（夕）

手ぶらの円がバスから降車する。
雪に覆われた歩道を滑りそうになりながら歩く。
円「……すごいな、道民は」
小言を呟きながら足を取られる円。
○二井住吉銀行・豊玉支店前（夕）
二井住吉銀行と書かれた看板。
暗くなった店舗前に立ちつくす円。
円の視線が扉の表記に移る。扉には、
『平日　営業時間 9:00~18:00』の表記。
円、携帯のロック画面を確認する。
ロック画面には『18:55』の時刻表示。
円、深く息を吸い不満を吐き出す様に
円「知っていました。知っていましたけど、
ワンチャンあるかと思っていました」
円、強く足踏みしながら二井住吉銀
行・豊玉支店を後にしようとする。
円の携帯から着信音が鳴り響く。
円「何？こんなうまくいかない時に」

円、携帯の画面を確認する。
琴子からの着信画面。
円、口を一文字状態にしながら、瞬きの数が多くなる。
その後、冷静に着信拒否ボタンを押し、SMSで『本当にごめんなさい。3日後には帰ります』と打ち込む。
円、もう一度深く息を吐き、
円「私のせいじゃ無いんだもん。全てはあの二人がげん……」
再び携帯の着信音が鳴る。
円「もー何？」
先ほどよりも激高した様子の円。
円、携帯の画面を確認する。

○札幌駅・南口（夜）
牧歌の像の前で不満気に立っている円。
佐野の声「おーい」
駅構内からリュックを背負った佐野が笑顔で走ってくる。

佐野「待った？」
円「待ってない、なんで？」
佐野「ほら、俺、無駄に感度がにいいからさ」
円「答えになってないよ」
佐野「学割で安く来られたからさ」
円「それも答えになってないよ」
佐野「まー来ちゃったものは変えられない事
実なんだし、楽しもうよ。それで、この
後の予定は？お供するよ」
円「この後？この後は特に何も無いけど」
佐野「ないの？じゃー俺の宿探しを手伝って。
ちなみに円はどこに泊まっているの？」
円「いや、まだ決まってないけど」
佐野「え？じゃー荷物は？手ぶらで来たの？」
円「近くのロッカー。これから取りに行く」
佐野「……紛らわしい行動すんなよ」
円「そっちの早とちりでしょ、帰らすよ」

○すすきの・外（夜）
大勢の人間で賑わうすすきの。

多くの人間が酩酊状態で千鳥足の中、
円と佐野はすり抜けながら通りを歩く。
佐野の顔が先ほどよりも少し青白い。
佐野「あのさ、ちなみに宿は本当にどうする
つもりだったの？」
円「え？……満喫か野宿か」
佐野「本当に？冬の北海道で野宿は死ぬよ」
円「らしいね、来てみて分かった」
佐野「らしいねって、そんな浅はかな考えで
ここまで来たなんて」
円、足を止め、
円「だって、雪国なんて来たことなかったん
だもん。旅行なんてお母さん死んでから
行かなくなったし」
言葉が急に強くなる円。
佐野「……でも円、地理得意じゃん」
円「亜寒帯の存在は知っていても、亜寒帯の
寒さは感じたことなかったもん」
声の大きさが小さくなる円と佐野。

佐野「どうするよ、満喫は無理。普通のホテルは親との同意とかがいるらしいし」
円「……今から、親にお願いできない？」
佐野「無理だよ、さっきから帰ってこい、帰ってこいていう電話がさ」
円「……うちも」
酔っ払いの笑い声だけが鳴り響く。
円「……最終奥義発動する？」
佐野「最終奥義って？」

○ホテルラブすすきの・外（夜）
『ホテルラブすすきの』の大看板。
ゲート前に立ち尽くす円と佐野。同じタイミングで唾を飲み込む。
円「どういう設定でいく？」
佐野「設定って？」
円「高校生ですって感じで入ったら断られるでしょ。成り切るの、大人に」
佐野「でも、どういう大人に」
円「それを今から考えるんでしょうが」

円、少しヒートアップしている様子。
円と佐野の前に酩酊状態のカップル男Aとカップル女Aが現れる。
カップル男A「今日はどんなのして欲しい？」
カップル女A「えー言わせようとしないで」
カップル男A「えー聞かせて」
カップル女A「だーめ」
カップル男Aとカップル女Aがエントランスの中に入って行く。
目を丸くする円と佐野。その後、互いに顔を合わせる。

○ホテルラブすすきの・エントランス（夜）
自動ドアが開く。
受付にいる目の細い老母Aが自動ドアに視線を向ける。
円「ちょっと言わせないでよ」
佐野「何、いいじゃん」
酔っ払った振りをした円と佐野が受付へ歩いてくる。

佐野「えっと、……フリーのやつで」
老母A「……どの部屋にしますか？」
老母A、視線を佐野から外さない。
佐野「え？あーこの安いやつで」
佐野を見る老婆の視線が厳しい。
老母A「……6020円です」
老母A、視線を佐野から外さない。
佐野、老母Aからの視線を感じ取った後、円に向かって熱量高く、
佐野「その鞄に詰まったパンパンのコスプレ全部着させたい」
円、少し顔を赤らめながら佐野の足を踏む。
佐野「いっ！現金で」
佐野、財布から現金を取り出し、カルトンに置く。
老婆「はいちょうど」
×　×　×
緊張した面持ちで受付を後にする円と佐野。

○ホテルラブすすきの・407号室（夜）

407号室のホテルランプ。

円と佐野、黙りながら荷解きをする。

佐野、ばつが悪い様子で、円をちらちらと見る。

円「明日は朝から早いから、早めにお風呂入ってよね」

佐野「うん。……あのさ」

円「何？お風呂後がいいの？」

佐野「さっきのは俺の本心じゃ無いから」

円、手が止まり、佐野の顔を見つめる。

円「本当に？」

佐野、焦ったのか口調が早くなる。

佐野「本当だよ、演技に決まってんじゃん。第一コスプレとかやったことないし。ノーマルもやったことないのに」

佐野、失言したことを数秒後に察し、顔が赤くなる。そして、無言でお風呂場に向かう。

円、佐野がお風呂場に行ったことを確認した後、表情を変えずベッドにダイブする。
その後、枕に顔を埋めながら、うめき声を上げる。

○ホテルラブすすきの・407号室（夜）
消灯後の室内。
円と佐野、ベッドで共に寝ている。
円は目を瞑っているが、佐野は携帯を触っている。
佐野、携帯の液晶画面を最大限に暗くし、過去の円とのトーク履歴を遡る。
暗闇の中、画面を何度も何度もスクロールする佐野。
円、寝相を変え、佐野と背中合わせの状態になる。
円、目を瞑ったまま、
円「寝ないの？」
佐野に聞こえるか聞こえないか程度の

声量で語りかける円。

佐野「……寝るよ」

佐野、携帯を触る事をやめ、円と同じ声量で話す。

佐野「……俺さ、察しはいい方なんだ。だから、円が満足するまで一緒に行くよ」

円、目を瞑りながらにやける。

円「ありがとう。でも、本当に察している？」

佐野「……していると思うよ。答え合わせは後でいいけど」

円「了解。私の方がまだ言う準備ができていないけど。……最後が最悪な絵図だとしてもついて来てくれる？」

佐野「勿論、満足するまで」

円「……私のこと分かっているじゃん」

佐野「当たり前じゃん、よく見ているから」

円「よく知ってもくれているもんね」

佐野「うん」

円と佐野、互いに目を瞑りながら、優しく微笑む。

○ホテルラブすすきの・外（朝）
ゲート前に出てきた円。スーツケースを片手に背伸びをしている。
佐野、目を擦りあくびをしている。
円「あれでしょ、自分家じゃないと安眠できないタイプだ。だったら、来なきゃよかったのに」
佐野「いや、基本的にはどこでも寝られるけど。疲れているのかな」
円、携帯のロック画面を確認する。
円「お疲れのところ悪いけど、今日は忙しない一日を送らせてもらうよ」
円、勢い良くスーツケースを転がし始める。
佐野「勿論です、お供します」
佐野、覇気のない声を発しながら、円の後を追う。

○札幌中央バス・車内（朝）

車窓越しの雪景色。数十秒間走行しても積雪の様子は変わらない。
佐野、窓際の座席で外景を写真に納めようとする。円、外景を見ることなく、携帯を見つめる。

○東豊高校前バス停（朝）
円と佐野、荷物を持ちながらバスから降車する。その後、雪に覆われた歩道を滑りそうになりながら歩く。
佐野「……すごいな、道民」
小言を呟きながら足を取られる佐野。
円「小股で歩くといいらしいよ」
佐野「こう？」
円「そう」
円と佐野、小股で歩道を歩く。

○二井住吉銀行・豊玉支店前（朝）
二井住吉銀行と書かれた看板。
支店の中は営業している様子。

円と佐野、店舗内に入らず、近くの
電柱に隠れて、中の様子を静観する。
佐野「ここにいつまでいる予定？」
円「んーお昼の12時過ぎくらい？」
佐野、顔を引き攣りつつ、
佐野「なるほどね、２時間。……楽勝です」
円「今日は27日。来るはずなんだよ、今日」
円、手を一瞬強く握る。

○二井住吉銀行・豊玉支店前（朝）
T「10時30分」
電柱に隠れながら、精悍な顔つきで店
舗を見つめる円と佐野。

○二井住吉銀行・豊玉支店前
T「11時00分」
電柱に隠れながら、精悍な顔つきで店
舗を見つめる円。

○二井住吉銀行・豊玉支店前

T「11時30分」
電柱に隠れつつ、あんぱんを食しながら店舗を見つめる円と佐野。
佐野「久しぶり食べた」
円「ね。なんであんぱんなんだろうね、サンドイッチの方が良くない？」
佐野「確かに、いろんな栄養素取れるし」
円「だよね」

○二井住吉銀行・豊玉支店前
T「12時00分」
電柱に隠れつつ、あくびをしながら店舗を見つめる円と佐野。円はニット帽を脱ぎ、前髪をピン留めで留め直す。

○二井住吉銀行・豊玉支店前
円の携帯のロック画面を確認する。
ロック画面には『12:04』の時刻表示。
ニット帽を脱いだ円は熱量高く、

円「いい？さっき言った通り、私は中に入る
から、佐野は怪しそうな人を追いかけて」
佐野「了解。その時、荷物は？」
円「んー、ケースバイケース。見定めて」
円、口調が強くなる。
佐野「ケースバイケースって？どうすれば？」
円「太っている人が出てきたら持ってでも追
いかけられるでしょう？そういうこと」
佐野「あーそういうことか、なるほど」
円「分かった？」
佐野「うん。了解した」
円の携帯に通知が届く。
円、メールアプリを確認する。
新着メールにて、『二井住吉銀行　振
込入金のお知らせ』が届いている。
円「任せたよ」
佐野「おう、任せとけ」
円、意を決し店舗へと歩き出す。
佐野、親指を立てながら円を見届ける。

○二井住吉銀行・豊玉支店・中

自動ドアが開く。

円、入り口付近で停止し、店舗内の様子を観察する。

店舗内は老若男女の来店者。

数秒間観察する円。その後、駆け足でATMコーナーに向かう。

○二井住吉銀行・豊玉支店・ATMコーナー

駆け足でATMコーナーへ入って来た円。

ATMコーナーには、丸メガネをかけた小源氏新（50）、小太りの中年男性A、中年女性Aの3名が居る。

円、小源氏と中年男性Aを見比べる。

そして、小源氏の元へ歩いて行き、

円「パパ、今日の晩御飯何にする？パパの好きなお好み焼きにする？」

小源氏は呆気に取られた表情をする。

円、真剣な眼差しで小源氏を見つめる。

小源氏も円の顔を見つめる。

円、小源氏の手元に通帳があることを横目で確認する。
円、唾を飲み込み、勢い良く小源氏が持っている通帳を奪う。
小源氏「ちょっと」
円、通帳に書かれた名義を確認する。

○二井住吉銀行・自動ドア前・外
肩を落とした円が出てくる。

○二井住吉銀行・豊玉支店前
電柱に寄りかかりつつ、腕を組みながら支店から出てくる円を見る佐野。
佐野「どうだった？その様子だと……」
円「分かっているのなら、聞かなくても良くない？そっちは？」
佐野「円が出てくるまで誰も来なかったよ」
円「本当に？」
佐野「……本当に」
円、腕を組み、顰めっ面になる。

円の様子を見かねた佐野は、

佐野「まー諦めるのはまだ早いと思う。人生ほとんどが代替案で成り立っているから」

顰めっ面のまま佐野の顔を覗き込む円。

円「良いこと言ってそうだけど、何か当てがあって言っているの？」

佐野「当て？具体的な当てはわからないけど、前に円が言っていた所とかは？」

○札幌中央バス・車内

車窓越しの雪景色。数十秒間走行しても積雪の様子は変わらない。

佐野と円、会話することなく、車窓から見える景色を眺める。

○札幌バスセンター

バスセンターの行列の先頭で待つ円と佐野。二人で携帯を覗き込んでいる。

佐野「ここで乗り換えた方が良くない？」

円「いやでも、前はここで降りたはず」

佐野「じゃー、その記憶頼りでいく？」
円「オッケー。その前にここのコンビニとこ
このロッカー行きたい」

○ JR バス・車内
車窓越しの雪景色。先ほどよりも降雪
が激しい様子。
窓際で外の景色を見つめる円。円の表
情を不安そうに見つめる佐野。

○江別東バス停
降雪の中、円と佐野がバスから降車す
る。その後、雪に覆われた歩道を小股
で歩く。
佐野「……見て。もう、滑る気配がない」
円「ちゃっかり、上達してんじゃん」
佐野「成長著しいからね、俺ら若者は」
佐野、足を滑らせ転びそうになる。

○市営墓地極楽苑・入り口

市営墓地極楽苑の書かれた石碑。その横を小股で通り過ぎる円と佐野。

○市営墓地極楽苑・敷地内

敷地内には沢山の墓石。

円、辺りをキョロキョロ見渡しながら歩く。佐野、円について行く。

円「こっち」

円、佐野へ方向を示しながら誘導する。

○市営墓地極楽苑・敷地内・遠野家墓石前

手桶を持った円と佐野が、遠野家の墓石の前に到着する。

『遠野家之墓』と書かれた墓石を見つめる円と佐野。

佐野「……お水する？」

円「うん」

柄杓で墓石に水をかけ始める円。

円「北海道は寒いでしょ。……地元だから寒さには慣れっこか？」

円、佐野の方を振り向き、その後墓石に向かって笑いながら、

円「この人誰か覚えている？あの手癖の悪い佐野友君だよ」

佐野「おい、緑野家で俺はそんな酷い呼び方されていたのかよ」

円「まず、挨拶でしょ」

佐野「どうも、ご無沙汰しています」

墓石に向かって、会釈をする佐野。

円、墓石へ水をかけ終えた後、ポケットから大きなおにぎりを取り出す。

円「お母さん、これ好きだったでしょ。帰省の度によく買って来ていた」

円、包装に塩さばと記載されたおにぎりを墓石に置く。

円「千葉でもご飯一緒に食べているけどさ、こっちでも一緒に食べよ」

円と佐野、自身のポケットからおにぎりを共に取り出す。

円「私、ベーコンおかか」

佐野「僕、チーズおかかです」
円と佐野、自身の持っているおにぎりを墓石に向かって見せる。
円と佐野「いただきます」
墓石に向かっておにぎりを食べ始める円と佐野。
円「うん、久々に食べたけど美味しいね」
佐野「うまい。さすがご飯の美味い県だね」
円「ね。あと、北海道だから道ね」
佐野「細かいな」
円と佐野、墓石を見つめながらおにぎりを頬張る。
佐野、おにぎりが喉に詰まりそうになり、胸を叩く。
円「お水買ってくればよかったね」
佐野「それ、ミスった」
円「見通しが甘かったか。お母さんはさっきのお水飲みなね。さっき注いできたから」
無言でおにぎりを食す円と佐野。
佐野、円の横顔を見ながらおにぎりを

口いっぱいに頬張り、円に向かって、
佐野「俺、先行っとくわ。邪魔者だろうし」
円「……なんて？」
佐野、しゃっくりをしながら遠野家の墓石から離れていく。
円「惜しいんだよな。でも、面白いくらい面影しかないでしょ？」
円、微笑みながら、墓石に語りかける。おにぎりを飲み込んだ円。その後、墓石に向かって優しい視線を向けながら、
円「千葉で話しているから知っていると思うけど、北海道のお母さんは数年ぶりだから、遡って話すね」
墓石に雪が積もりつつある。
円「自分で言うのもなんだけどさ、強くなった方ではあると思うんだ」
墓石の文字をまじまじと見つめる。
円「割り切れる力っていうの。色々な事に手を出しては時間を割けるようになった」
円、しゃがみ込み、土いじりをする。

円「ごめんね、今回北海道に来たのは、お母さんに会いに来ただけではないの」

土に指で８と２を描く。

円「今日まで約８割。お父さんは裏切り者、薄情者、私の中で亡き者だと思って生きてきた」

円、墓石に再び視線を向ける。

円「だが、この期に及んで、好奇心が恨みを勝ってきた」

円、少しニヤリと笑いながら、

円「いいことだと思っている。ただ、一番いいのは彼が程々にいい人だと分かること」

円、墓石の前から立ち上がり、墓石に積もる雪を払う。

円「また、積もるけど」

円、除雪した墓石をじっと見つめる。

円「じゃー冒険に出てきます、達者で」

円、控えめに手を振り墓石から離れる。

○市営墓地極楽苑・敷地内

遠野家の墓石から少し離れた所で、住職姿の小源氏と佐野が談笑している。

佐野「じゃー、浄土真宗だけは頭を剃らずにお坊さんができるんだ」

小源氏「そうです。信心の道に興味があるようでしたら、是非とも……」

円と小源氏、目が合う。

円と小源氏「あっ」

円、申し訳ない表情をしつつ会釈する。

円「先日はすみませんでした、早とちりで」

小源氏「全くですよ、どうもお久しぶりです」

佐野「何？ズッ友？」

円「そんなんじゃないよ」

小源氏「本日はお参りですか？」

円「はい、久しぶりですけど」

小源氏「いい事です。お供え物もして」

円「はい、母が好きだったおにぎりを」

小源氏「おにぎり？あー貴方方、遠野さんのお子さんだったのですね」

円「ん？母を知っているのですか？」

小源氏「いえ、お母様は。ただ、お父様は毎月おにぎりをお供えしてらっしゃるでしょ？今月はお父様の代わりですか？」

円、遠野家の墓石のある方角を向く。

円「……はい、父は今月忙しいもので」

円、小源氏の顔を見ず返答する。

小源氏「そうですか。よかったら、お父様に伝言もお願いできますか？」

円、小源氏を見ず無言を貫く。

佐野、円の代わりに小源氏に質問する。

佐野「ちなみにどのような伝言を？」

小源氏「大したことではないのですが、以前教えて下さったお言葉、かなり参考にさせていただいていると」

佐野「言葉？」

円、遠野家の墓石のある方角を向きながら、ゆっくり目を瞑る。

小源氏の声「はい。慈悲深くリアリストな現代人に対して真っ当なお言葉であったと」

円、目を瞑りながら小源氏に質問する。

円「話を変えて申し訳ないのですが、父はお参りの際、どの様なおにぎりを？」

小源氏、腕を組みつつ上空を見上げる。

小源氏「そうですね。確か、毎回塩さばのおにぎりでしたかね」

円、目をゆっくりと開く。

小源氏の声「珍しいのでね、覚えていますよ」

○千葉県立大原高等学校・教室

『3-2』と書かれた教室表札。

机上には『プレ共通テスト』と書かれた模試の用紙。

前髪を作り耳後ろの髪をピン留めで留めている円。他の生徒と同様に静かに机上の問題を解いている。

教壇前に立つ桃華。腕時計を見ながら、

桃華「回答やめ」

○市道102号線（夕）

収穫を終えた田園風景の中を自転車で

駆け抜ける円と佐野。

佐野「地理、校内一位はやっぱすごいよな。結局志望校は変えるの？」

円「変えるつもりないよ。学費掛かるけど今こそ、ベットすべき時だと考えるから。あと、そう言われている気がするから」

佐野「なるほどね。……いいんじゃない？」

円「……珍しい。最近は私のストッパーになってくれていたのに、今回は肯定して」

佐野「別に闇雲にストップかけて欲しいわけじゃないだろ、円は？」

円「……私のこと、かなり分かってんじゃん」

佐野「だろ？死ぬ程一緒にいるからな」

円「さすが」

円と佐野の間隔が次第に開いて行く。

佐野「じゃあ、また明後日」

円「じゃあ、また」

円と佐野、互いに手を振り、二手に別れて行く。

○円の実家・円の部屋（夕）

問題集が机上に積み重ねられている。

ドアの開閉する音。

円、学校規定のジャージに着替える。

机に向かい合う円。その後、耳の後ろのピン留めを外し、前髪を留める。

机上に積み重ねられている教材の中から、地理Ｂの問題集を手に取る。

真剣な表情で問題集を解き始める円。

携帯に新着メールの通知が届く。

円、携帯を見て微笑みを浮かべる。

○北海道・北海学園大学・地質学研究室（夕）

誰もいない研究室。

机上には沢山の書物と一台の携帯。

携帯に新着メッセージが届く。

メッセージには『濁流も清水に帰す。

これは僕が２年越しに知ることができた言葉です』。

（了）